



教育の原点

副学長（国際担当）
教育学部 教育学科 教授

吉田 晴世

本年度より、本学に着任いたしました。どうぞよろしくお願い致します。

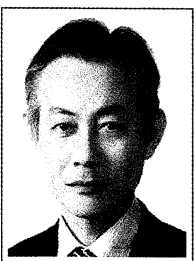
桜満開の花道を通り抜けた正門から最初に目に飛び込んできたのが、キャンパス中央にそびえる威風堂々とした八角形の講堂でした。新型コロナウイルスの影響で、毎週木曜日の礼拝にて行われる聖徳太子の教えである「和の精神」の講義を学ばせて頂く機会をまだ持てておらず、残念でなりません。

「和の精神」とは、聖徳太子の教育の原点であり、太子が十七条憲法を制定した第一条では「和の精神」こそが智を啓き、道徳心を養う根本であるとしています。これは、太子が帰依していた仏教と、中国から伝来していた儒教の融合から生まれた思想ですが、もともとは「礼

の用は和を貴しと為す」という論語の一節が原点でした。「礼」を重視し、上に立つ人間が、下の人間に対して礼をもって接すれば、自ずと下の人間にも礼の大切さが身についていくと説いています。

「令和」の由来が『万葉集』にあることは、元号が発表になった時に報道されました。この元号の発案者と言われる国文学者の中西進さんは、令和の「和」から「和を以て貴しと為す」を思い浮かべると仰ったことをご存知の方も多いことでしょう。

この教えは、我々教育に携わる者にとっては重要なことはもとより、学生みなさんにとっても、先輩後輩の関係、アルバイト先等での人間関係、仲間同士であっても通じるものです。どんなに仲のいい人でも、一緒にいれば嫌なところの一つや二つ見えてくるものです。ましてや、職場や地域のコミュニティなどは仲がいい人ばかりの集まりではありません。いろいろと気の合わない部分も出てくるのではないのでしょうか。それでも、協力して物事を行うためには「一つにまとまる」ことが不可欠で、これは、お互いの努力で作り上げていくものなのです。私自身、教育の原点である「和の精神」を忘れずに、精進努力してまいる所存です。



新型コロナウイルス禍に寄せて

事務局次長
IR・戦略統合センター長

一居 利博

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、多大な影響を受けておられる方々に、心からお見舞い申し上げます。

今般の感染症は瞬く間に世界中に広がり、社会に恐怖と不安をもたらしました。国からは人との接触や営業の自粛といった要請がなされ、本学でも各種行事の中止や延期、遠隔授業の導入となりました。

学生の皆さんは学修上の不便さを感じていることでしょうし、教職員も懸命に取り組んでいる状況にあります。学生の皆さんと教職員が一体となり、和してこの困難な状況を乗り越えていきたいと思ひます。

さて、緊急事態宣言解除後、外出自粛が緩和されつつありますが、7月に入って感染者数が増加に転じ、メディ

アでは「第2波」の到来とも報じられています。

平時の状況を取り戻していくためには、やはり一人ひとりが如何に自らの行動を律することができるかが鍵と言えるでしょう。

振り返りますと、感染拡大当初にマスク、消毒液、トイレットペーパーや保存食品等の「買いだめ」「法外価格での転売」などが社会問題となり、今では「3密回避」の強い要請下にありながら、夜の繁華街などでの感染拡大が報じられています。こうした状況の背景には、「自己の利を優先した行動によって生じている」という共通点があるように思ひます。

もし、自分のことよりも他者を思い遣る行動ができていれば、本当に必要とする人々に物資が行き渡ったでしょうし、また、自ら感染リスクを回避する行動に徹していれば、他者への伝染を防ぐことにも繋がったはずで

このことに限らず、他者を思い遣る行動が理屈でなく当たり前に行えるようになれば、社会全体の幸福が保たれるように考えます。

私自身も日頃の行いを省みて、そのような実践ができるよう精進したいと思ひます。

❖ 利他 一私のためはあなたのため、あなたのためは私のため

エクステンションセンター長
人文社会学部 日本学科 教授

源 健一郎



利他の精神とは、建学の精神、学園訓の基礎となる重要な仏教精神です。実は2年生以上の皆さんは、毎週、聖徳太子像の前で利他の実践を誓ってきました。1年次必修授業である「和の精神」(「仏教」)において、般若心経に続いて読誦する回向文こそ、利他の精神を実践するという誓いであったのです。

願以此功德【訳】願わくは、私の行った善行の果報(自利)が、

普及於一切【訳】この世の生きとし生けるもの、一切に行きわたり(利他)、

我等与衆生【訳】私を含むこの世すべての存在が、

皆俱成仏道【訳】みな一緒に仏道を成就できますように

(『妙法蓮華経』化城喻品第七)

仏教において、自らの悟りのために修行し努力すること(自利)と、他の人の救済のために尽くすこと(利他)は、共に完全に行われるべきもの(自利利他)であり、それこそが大乘仏教の根本精神とされます。回向文とは、經典読誦の締め括りとして、その功德を自他に及ぼしたいと願って誦する偈文であり、まさに自利利他の誓いなのです。

私は古典文学を専門とする教員ですので、利他の精神について、物語から解説してみましよう。平安末期における動乱を描く『平家物語』に、平維盛という人物の逸話があります。清盛の嫡孫で、武士でありながら、都を代表する優美な貴公子でした。その維盛が最期を遂げるまでの有り様を、物語は次のように語ります。

源平合戦のさなか、四国の屋島に構えた平家の拠点から、維盛は密かに抜け出します。平家の行く末に絶望した上での裏切り行為です。「都に残した妻子に会いたい」という一心でしたが、敵である源氏が支配する都には近づけもしないと、すぐに思い知らされます。平家のもとにも戻れず、都にも向かえず、進退窮まった維盛は、高野山に住む旧知の僧、滝口入道を訪ねます。維盛は、滝口入道の勧めによって出家し、熊野三山参詣に赴きました。

熊野三山とは、現世において劇的なよみがえりを果たすことができると信じられた聖地でした。絶望的な平家の状況が好転し、都から源氏が退散すれば、また妻子に会えるかもしれない、といった僅かな望みを、維盛は胸に抱いていたのでしょう。しかし、何事も起こらないまま、最終目的地、那智に到着してしまいます。

維盛には、熊野の神の加護によって、あの世で救われるよう願うこ

としか選択肢はありません。滝口入道とともに那智の沖に向けて小舟を漕ぎ出し、入水自殺を志します。滝口入道の使命は、維盛が執着を断って往生するための説教でした。執着を抱えたままでは、浄土に往生できないからです。滝口入道は様々な比喻因縁を説いて、維盛が執着の思いから放たれるよう言葉を尽くします。しかし、口では念仏を唱えながらも、維盛の頭から妻子への執着は消えません。大海に漂うまま日没を迎えると、帯同する滝口入道たちの身も危うくなります。滝口入道は意を決し、最後の説教をおこないます。維盛が執着を振り払って極楽に往生し、成仏したならば、今度は維盛自身が仏縁としてこの世に立ち回り、妻子を仏の道に導くことになる、と説いたのです。これを聞くやいなや維盛は、念仏とともに、決然と那智の海に身を投げました。

維盛の思いの変化を振り返っておきましょう。那智の沖に出た維盛は、「もう死ぬしかないが、どうせ死ぬなら極楽に往生したい」と考えていました。往生のために仏道修行すること自体は善行ですが、それだけでは、自分のことしか考えていないことになります。自利にとどまっているがゆえに、結局は自分自身の本当の願望、妻子との再会という執着から自由になることができません。ところが、執着に囚われていた維盛の心に、滝口入道による最後の説教がようやく響きました。「執着を振り払って仏道に専念し、入水という手段を経て、自らが極楽に往生してこそ、妻子も仏道に目覚め、善行に勤しむはずだ。私の亡き後も、妻子は仏縁に守られ、救われるのだ。」維盛はこのように考えたのでしょう。維盛は利他の精神に目覚めたのです。それによって自らも救われ、妻子も救われると確信したのでした。

維盛の入水は、動乱の時代における究極の選択です。自らの命を絶つ自殺は、仏教が戒める殺生の一つであり、肯定できるものではありません。しかしながら私たちは、維盛の選択を、遠い昔のことと他人事のように考えてよいのでしょうか。

近代日本では、一貫して個人の権利の確立が追求されてきました。これはとても大切なことです。しかしながら一方で、近年、個人の権利意識が肥大化する弊害も目に付くようになりました。モンスターペアレント、クレーマー、ストーカー・・・、こうした概念は21世紀以降、急速に定着しました。ある意味、自利にのみ囚われた権利意識の暴走と言えましょう。

死以外に進む道のない維盛でさえ、利他に目覚め、救われていました。日々、無事に生かされてある私たちこそ、自らの正しい行動を、他人のために役立たせることに自覚的であるべきでしょう。皆さん一人ひとり、自利利他の小さな誓いが重なっていけば、きっとこの世の中に、幸せを感じられる人々が増えていくはずです。「わたしのため」だけではいけません。「わたしのためはあなたのため」であり、翻って「あなたのためはわたしのため」であるのです。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました(本号では新型コロナウイルスの影響で取材が行えなかったため、同欄に李美子研究員による「西琳寺」を載せています)。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参

加し、その実施状況をレポートしていただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

(中田 貴真)



第 17 回 卒業生インタビュー

話し手：山本 雅代（やまもと まさよ） 富田林市立 若葉保育園園長
昭和 57 年 3 月 短期大学部保育科卒業生

聞き手：坂本 光徳（和の精神Ⅰ・Ⅱ導師・人間福祉学科健康福祉専攻専任講師・本欄編集）

仕事について

大学を出て 39 年目となります。ご縁があり富田林市職員として勤務して市内 6 か所の保育園に関わってきました。園長になったのは 4 年前からで、今年の春に現在の園に異動したばかりです。

園長としては経験が浅いのですが、長い保育士人生において、子どもの育ちと保護者の就労保障とそして地域支援を大事にしてきました。保育園の建設や一時保育の事業の設立に多々関わってきた経験があり、それを生かして園長として働いています。

今までも、O-157 食中毒事件、池田小学校事件、東北東日本大震災、大阪府北部地震などの社会変化を経験する中、保育園は大きな児童福祉施設ということを認識してきました。今はいわゆるコロナ禍の真っ只中で、子どもの命を守りどう育てていくかを考えている毎日です。

長く働いているけれども今までに経験したことがないばかりの中、保育園の運営をしています。実際には感染症対策をどのように図るかということを中心に、子どもや保護者との距離の取り方であったり、体調確認であったり、どのように連絡を取るのかなど、話し合いを繰り返しながら進めてきました。

4 月 5 月は急遽に職員を 2 分して、交代勤務にもしました。保育園は運営が止めることができないためです。また様々な事情を抱えた児童を受け入れる中、他とは違う意味での命の保ち方についても公的機関との連携もしながら考えました。

また園長になって痛感するのは、職種も雇用契約も異なる様々な職員がいる中、協力しながら運営していくことの難しさです。このコロナ禍においてどのように情報共有をするのかをはじめ、個人情報についてはどの程度まで共有するのかなど日々注意しています。

礼拝について

まず入学後に四天王寺で礼拝して数珠をいただいたのを覚えています。そして在学時は木曜日に黒いスーツに身をまとい、一時間目に礼拝堂で般若心経を唱えたり、写経をしたりする授業という印象です。

私には 100 歳近くまで生きた祖母がいたのですが、仏教を熱心に信仰していましたので、般若心経は小さいころから身近な存在でした。祖母のこともあり般若心経はそらで唱えることができるので、今でもお寺に参拝すると唱えたりします。そのこともあり、在学時に毎週、般若心経に触れていたということが思い出です。祖母のこともあり、仏教自体がそれほど遠い存在でもなかったし、何かが分かるということでもないけれども改めて身近なものであったと振り返りました。

キリスト教の大学も受験したけれども、四天王寺大学に入学したこともあり、キリスト教に見捨てられて仏教に救われたと冗談で話すことも多いのですが、仏教に縁があったのだと思います。

学園訓について

聖徳太子の四天王寺ということで「和を以て貴しとなす」は有名だと感じていました。この 100 年に一度ともいえるコロナ禍は、少し前でもこのような状態になるとは誰もが想像できなかったと思います。こんな現在だからこそ子どもも大人も気持ちが悪くはならないとか、人を尊重していくことがより一層大事かと改めて学園訓を見て思いました。

この健康の維持も難しい中、やっぱり人のつながりがあって、初めて人というのは生きていけるのではないかと思います。また、なにごとにも誠実さはもちろん大切となります。

私は今一人暮らしをしており、コロナ禍の状態において友達とも会えない、それでもどう人とつながりを持ていか、自分の思いを素直に出せる相手がいるのか、受け止めてもらえる相手がいるのかどうかというのは凄く大事と感じました。

多くの子どもと保護者に会える保育園に勤めて、園長になり、思うのが大人も子どもも安心できる保育園でなければならないということです。働きやすく、安心できる保育園を目指して考えてきました。コロナ禍で安心できる状態については、現在も職員と日々会議を続けています。子どもの発達や育ちを共有しながらも、一番優先すべき子どもの命をどう担保していくか、子供たちにできることは何かということを日々話し合っています。

在学生へのアドバイス

保育園では実習生を預かることが多く、当然四天王寺大学の学生も受け入れることがあります。私も後輩ということもあり積極的に受け入れています。

私は実習生の受け入れをする際は、保育士でなくとも、子どもに関わる仕事に就きたいかどうかを絶対に聞くことにしています。私の時代は同期に資格だけを取るという人も多くいました。現場で実習生をお預かりすることとは、すごく大変ということもあり、最初に子どもと関わっていききたいかどうかということは聞かせてもらっています。

私は、地元の先生に勧められて、幼児教育を目指すことになったのが高校三年からでその時にピアノも習いはじめました。学生時代に保育園に実習に行き、そこで出会った先生がとても人間性に満ちあふれていて、魅力的な先生でした。当時は幼稚園教諭を目指していましたが、そこで保育士というのはなんて良い仕事なのかと思い、方向転換して保育士になりました。

学生の時に学ぶことは基礎であり、社会の在り方というのはやはり社会に出てから学ぶことになります。そのため社会人になってからも日々学びです。それは保育士に拘わらず、他の仕事でも言えることです。大変だと思うこともありますが、人を育てるといふか、「育ちあう」ことができる良い仕事です。そのため目指す人には、是非頑張っていたきたいと強く思います。



「和の精神Ⅰ」の授業について

令和 2 年度の「和の精神Ⅰ」は、諸般の事情により冬学期開講となりました。

本学創設の基礎を築かれた聖徳太子は、人々の救済を願って四箇院（悲田院・療病院・施薬院・敬田院）の制を設けられました。特に本学の源流である敬田院は人々が自ら宗教的情操を涵養し、人格の陶冶をはかり、理想とする未来像の実現のための強い意志を鍛える修養の道場でもありました。

つまり、本学では、聖徳太子の「和の精神」を身につけ、現代社会に活かしてゆくことが、建学の理念となっています。その具体化のために、この科目では仏教の修行方法の一つである瞑想を中心

とした実践を行うとともに、「和の精神」に基づく学園訓の理念とその意義を学びます。

また、瞑想の実践により物事を冷静に正しく理解する智慧を獲得するとともに、広く社会に役立つ「和の精神」を体得した人格の形成を目指します。

冬学期開講予定の授業では各回を通じて、瞑想を行い、安定した人格の形成を目指すとともに、「和の精神」に基づいた日常の心構えと態度を身につけ、それを実践できるよう、学修をすすめていくことになります。

■ 聖徳太子ゆかりの地をめぐる

一 西琳寺（大阪府羽曳野市古市）一

近鉄南大阪線の古市駅で下車しますと、踏切の向こう側に「聖徳太子霊場第四番・河内飛鳥古寺第七番 西琳寺」という標示板が、四天王寺大学という標示とともに見えてきます。この西琳寺の案内標示には「東へ400M」と書かれていますが、その東には一筋の細い道が静かな住宅街へと延びています。この細い道が、実は日本最古の国道と言われる有名な竹内街道なのです。今は両側に住宅が広がり、綺麗に整備はされていますが、そこからは往古の「繁栄」の姿を偲ぶことはできません。その竹内街道を少し進みますと、「右大坂、左大和、すぐ高野山」と彫られた石標が立つ十字路に至り、そこに京都から高野山に通じる東高野街道が交差しています。この東高野街道に沿って北へ向かい、すぐ右の小道に入ると20メートルの突き当りに、西琳寺が見えてきます。両側が民家に挟まれて、あまり目立たないのですが、お寺の門前には「欽明桓武天皇勅願處」「本尊中に薬師道」などと記された石碑がいくつも並んで立っています。そして山門の右には「高野山真言宗向原山西琳寺」、左には「聖徳太子御遺跡第四番霊場」と書かれた木製の立て札が見えております。これらの門前の情景から、西琳寺は仏教伝来の由緒があり、また聖徳太子ゆかりのお寺であることが感じられます。

西琳寺の歴史を記録した『西琳寺文永注記』（『西琳寺縁起』とも略称）には、西琳寺は古市寺ともいい、欽明天皇の「己卯年」九月七日に、「大山上」の冠位をもつ文首阿志高が諸親族らとともに、この寺と丈六（約480センチ）の阿弥陀仏の像を建立したとあります。また、阿志高とその子の梅檀高と土師長兄高・羊古・韓会古らがさらに



塔を建立し、この阿弥陀仏像と二体の菩薩像を「宝元五年」の「己未年」正月に制作したことも伝えられています。記録上の問題点も指摘されていますが、ともあれ、西琳寺は619年に建立の事業が始まり、さらに659年に引き継いで造営されたものと推測されます。西琳寺の山門をくぐると、ひっそりと静まりかえった境内に目に入るのが、高さ

2メートル近い巨大な石で、これが塔心礎とされています。この塔心礎は、塔礎としては飛鳥時代最大級のものでされています。この塔心礎の大きさから推測すると、当時はかなりの大寺院であったことが思われます。また当時このお寺を建立した文首阿志高一族の財力のすごさ伺えます。



発掘調査によって、東は塔、西には金堂を置いた法起寺式伽藍配置であったとされ、お寺の周辺には、この西琳寺経営にかかわったと思われる文首一族の居宅が存在したと考えられています。

「文首」一族は、文筆によって倭王権に奉仕したフミヒト（史人・文人・書人）を管轄した渡来系氏族とされています。河内国古市郡（羽曳野市）を本拠地としたことから、西（河内）文首（かわちのふみのおびと）とも称され、朝鮮半島の百濟より『千字文』『論語』を将来した和邇吉師の後裔氏族であると指摘されています。これらの渡来系氏族はかなりの財力を保持し、この竹内街道と東高野街道の要衝地を抑え、勢力を維持しながら壮麗な寺院も営んでいたとされているのです。しかし、時代の変遷によって文首の渡来系氏族も没落し、やがて歴史の表舞台からも消え、それに伴って西琳寺も廃れていったようです。

鎌倉時代に入り、真言律宗の叡尊上人によって荒廃していた西琳寺は再建され、律宗の道場となりましたが、室町時代から相次ぐ戦火にあって衰え、消失したとされています。江戸時代に一時期再建されましたが、明治時代の神仏分離令によって再び廃寺となり、現在のお寺は昭和二十年代になって復興されました。本堂は1990年に再建されましたが、かつての規模より一回り小さい形で、ひっそりと住宅地の中にその姿を留めています。

いずれにしても、西琳寺は日本仏教黎明期における大規模寺院のひとつであったことは確かです。栄枯盛衰の歴史の中で、仏教を信仰する人々の懸命な努力によって復興維持され、その法灯の教えである聖徳太子の精神をいまに伝えているのです。

（李 美子）

仏教のことば

三密

今の状況で「三密（さんみつ）」といえば、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために避けるべき3つの密、つまり、「密閉・密集・密接」を避ける、ということが心に浮かぶ人がほとんどでしょう。しかし、仏教の言葉にも、「三密」があるのです。それは、「身密（しんみつ）・口密（くみつ）・意密（いみつ）」の三つです。身密とは身体・行動について、口密とは口から出す言葉について、意密とはこころ・考えについて、冷静に自己分析をしない、それを日々の生活の中で

実践しなさいというのが、仏教の「三密」の教えなのです。

私たちの生命は「身・口・意」で構成されているのですが、実は、この「身・口・意」は日常生活の中で苦を生み出すものでもあります。わがままな行動をとってしまった・悪口を言ってしまった・思わず人を殺してしまった。うーん、反省。自分って駄目だな・・・

しかし、こう思えるからこそ、私たちは成長できるのではないのでしょうか。「あの時、なぜ、あんなことを」と冷静に自己分析をすること、それが、より良く生きるための力になるのです。となると、誰かのために「三密」を避けようという今の新型コロナ対策とも、通じるところがあるのかもしれませんが。「人に嫌な思いをさせない・みんなが安心して生きられる世界に」という想いを込めた言葉であることに、違いは無いともいえるでしょう。

（南谷 美保）

編集後記

まさに青天の霹靂ともいべきコロナ禍の影響により、今までの日常すべての見直しを余儀なくされている状況のなか、関係者の皆さまのご協力によりウパーヤ17号が予定通り発行できまことに心より感謝いたします。今号は、今年度4月に着任されました吉田副学長の「教育の原点」、一居IRセンター長の「新型コロナウイルス禍に寄せて」と源先生の「利他行」について、また、卒業生インタビューなどを通して、「和の精神」「利他行」など聖徳太子の教えや仏教精神の原点について新たな視点から学ぶ機会となりました。当面は、不安を抱えつつ今までは大きく異なる「新しい日常」を生きていることになるでしょう。しかし、このような状況であるからこそ人間のあるべき姿を説く仏教の教えが、我々の心の拠り所となるのではないのでしょうか。コロナ禍の一日も早い収束を願いつつ編集後記といたします。(Y.I)

研究所員紹介

所長	岩尾 洋(学長・教授)
主任研究員	藤谷 厚生(教授)
研究員	石田 陽子(教授) 上瀬 宏道(教授)
	源 健一郎(教授) 南谷 美保(教授)
	矢野 隆男(教授) 杉中 康平(教授)
	奥羽 充規(准教授) 李 美子(准教授)
	坂本 光徳(専任講師) 中田 貴真(専任講師)
	南谷 恵敬(客員教授)
客員研究員	桃尾 幸順

UPĀYA(ウパーヤ) 17号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和2年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940

URL: <http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

[E-mail] bukken@shitennoji.ac.jp

(件名は「ウパーヤ」としてください)



お知らせ（ウパーヤ17号について）

この度、本17号の第一面にご寄稿いただきました副学長の吉田晴世先生におかれましては、去る8月22日に体調を崩され、ご逝去なされました。

先生には、本学に着任早々に「教育の原点」と題する玉稿を賜りましたが、その文面からは、先生の温かいお人柄と共に、建学の精神である「和の精神」を大切にしながら、本学の発展に力を注ごうという、並々ならぬご決意が伝わってまいります。これが先生の絶筆となりましたことは、誠に残念であり、また惜別の念を禁じ得ません。

ここに、この悲報を皆様方にお知らせ申し上げますとともに、吉田先生の長年に渡る教育界でのご功績を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

仏教文化研究所